

友愛者宣言―『共産党宣言』はこう書くべきだった。…その二

“Manifesto” for the Friendship Society(II) Y. Kobayashi

小林 弥 六

これにたいして、『共産党宣言』が主張する方式のいわば一揆主義的かつ暴発的なエネルギーを含む暴力的な革命運動は一八四八年のドイツの六月革命も、一八七一年のパリ・コミューンも、一九一七年以降のロシア革命も殆どすべてが失敗に終わっている。かりに形式的に革命が成っても、権力闘争のあげくに、すべてが、結局は独裁政治に転化してしまっている。

しかしながら、一九八八年においても、エンゲルスはフランスのブルードン主義やドイツのラッサール主義やイギリスの労働組合主義トレード・ユニオンなどの平和的改革方式を強く排斥する。のちにレーニンも、同じ方式でカウツキーやベルンシュタインの社会民主主義を口汚く罵っている。

これは「光の革命」を可能にするどころか、本当の「光の勢力」たる友愛主義者たちを迫害することであり、結果として「闇の勢力」を裏側から支援することになったのである。

ところで既述の段階的推移と発展があるにせよ、資本主義が労働(力)の商品化に基礎をおくことから、過少消費ないしは過剰生産の宿命的な体質を持っていることに変わりはない。資本主義は本質的に矛盾と不均衡の社会制度である。そのために、資本主義には、つねにといつてよい程に、侵略主義や市場争奪戦や周期的戦争がつきまとう。

戦争は商品市場や資本市場の開拓や資源の入手や労働力の確保、各種の利権確保のために大変役に立つ。戦後の復興需要もある。資本主義と帝国主義は初期の米國、インド、オーストラリアその他の植民地獲得の時代から殆どつねに手を携えている。このことは、植民地主義ないし帝国主義が、第一次世界大戦までのいわゆる古典的帝国主義の時代の産物だけではないことを示す。初期資本主義の重商主義の時代も、自由主義の時代もさらにまた第一次世界大戦後も第二次大戦後の現在も新帝国主義の傾向がある。いわゆるパックス・アメリカーナの下で第三世界の独立した国々も、アメリカをはじめとする旧宗主國の大国の政(軍)経各面でのさまざまな干渉と圧力を受け、モノカルチャー化(一次産品中心型経済)への強い圧力を受け、実質的には不等価交換(アミン、フランク、ウォーラーステインらの新従属理論が説くような)を強いられてきた。そのため、一人当りの低所得からなかなか抜け出せず、工業化もままならない。累積債務は天文学的数字に達し(とくに七〇年代以降に)、さらに増加する勢いである。また、人口増加がいちじるしく、職なく食物なく飢えに苦しむ人々が多い。こうして国際政治面での発言力が弱体化されている。

元來、第三世界の惨苦は歐米大国による植民地化による収奪によって構造化されたといえるが、第二次大戦後四十年をへた現在でも米英仏さらには独日などの諸大国の同盟(グループ5すなわちG5やG7などのかつての列強)によって、政治・軍事的な圧力(安全保障という名目の利用も含めて)と絡めた実質上の経済的ならびに政治的収奪がおこなわれている。市場経済(market economy)の形式的な平等性とうらはらに、実質はそうなのである。

東西冷戦時代には、資本主義と社会主義との体制的対立が、米欧等大国による世界の他の諸国にたいする政経両面での支配と利用の口実にされてきた。ポスト・マルタの「冷戦の終焉」のあとでは、米国の経済的後退もあって米国を中心にして、米欧日の大国の同盟いわゆる三極の同盟(「超帝国主義」……カウツキー)によって、第三世界の政経両面での支配と利用がおこなわれる形勢になってきている。日独の軍事支出とハイテク兵器で米国(英仏)が中東のヘゲモニーを掌握した、一九九一年の湾岸戦争後のいわゆる「世界新秩序」(new world order)や、さらには今日の諸大国が操るともいえる、国連による、世界覇権主義あるいは世界政府樹立による世界独裁への巧みでかつ熾烈な工作はこのことを象徴している。

湾岸戦争は今、日独の両敗戦国(第二次大戦時の同盟国)の軍事・政治大国化(great power)を呼び出しつつあり、世界は第二次大戦前の状況に近似する状態に急速に逆方向にタイム・シフトつまり先祖返りしつつある。あるいはまた米英仏独日中等の大国が出揃い、米欧日等を中心に、それぞれブロック化(三極化)が進む形勢もあって、二十世紀初頭の第一次世界大戦前に似た情勢に復帰しつつある。(あるいは甚間では、国連(UN)権限強化をつうじて世界帝国形成への野望もあるやに伝えられる、かつその傾向がかなり露わになっている)。

これに旧ソ連(CIS)・東欧や中東の混乱や中国の台頭が加わり、それが世界大の核戦争やハイテク戦争につながる。つまり旧ソ連(CIS)・東欧や中東の混乱や中国の台頭が加わり、それが世界大の核戦争やハイテク戦争につながる。九十年代以降、統一ドイツの経済・軍事両面での大膨張、日本の対外経済膨張と(アジア経済圏)リンクする対外軍事膨張(PKOの自衛隊海外派遣や改憲問題)や国家主義の台頭、日米欧間(EC、NAFTA、EAECCやAPECなども)の諸種の摩擦と不況の長期化は、中東問題やアジア太平洋圏の重要化や旧ソ連・東欧の民主化、さらには中国の動向と絡み世界的な大動乱の種を育てている側面がある。

このように、米ソの二つの超<sup>スーパ</sup>大国の覇権が崩れかけ、ワルシャワ条約機構が解体して、米国の経済力の後退が、世界の多極化を進めている。中東問題・環太平洋圏（アジア太平洋圏）問題、第三世界の窮状と紛争、ソ連・東欧・中国、南北朝鮮、民族紛争・宗教紛争その他の動乱や紛争の芽（工作も含めて）は、地球上のあちこちに無数といつてよいほど転がっている。

ウォーラーステイン（川北稔訳『近代世界システム』ⅠⅡ岩波現代選書）らが論じるように、近代資本主義はもともとセンター（中心）とペリフェリー（周辺）との二極構造で発展するかたちをとっている。センターとペリフェリー、それにセミ・ペリフェリー（準ペリフェリー）の範囲は時代によっていろいろ変わるもので、必ずしも固定化してはいない。しかし、資本主義は本来が帝国主義的ないしは準帝国主義的な力による服従（たとえば市場開放、つまり強者が弱者から奪う）強制と利用の権力的な体質を、一貫して持っていることを見落としてはならぬ。

このことから大部分の経済学がそう説いているように、資本主義ではすべてが平等・対等でクリーンで純粹経済的關係である、契約によって成り立つ経済体制であるとかかむのは、その実態を見失うことになる。資本主義はじつは権力的な支配と収奪の關係が巧みにビルトインされた社会システムなのである。したがって、経済学は政治経済（political economy）でもなければならぬ。

資本・賃労働關係についても、これがいえる。富者ないし強者が人々から土地や富（資本）や職業を奪った時に賃労働者やサラリーマンが出てくる。このことは、エンクロージャー（囲い込み）運動が象徴している。直接に囲い込み奪わぬまでも競争上營業が不可能になる。企業側の資本蓄積やイノベーション（いわゆる資本の装備率アップ）資本の生産性アップ）で、勤労者の労働の持つ意味がますます小さくされる。彼等を賃労働で暮らすしかない状態に追

い込み、機械装置の巨大化やハイテク化等で労働の役割を小さくする。一方で企業は大資産を蓄積する。したがって企業と勤労者の格差が巨大化して、勤労者は経営者にたいし対等な立場で自らの労働に対する良い報酬を要求することがますます難しくなる。大部分の経済学が教えるのとは違い、労働市場、労使関係、いわゆる資本・賃労働関係では労働者は労働機械、いわば役畜として支配し管理されているのが実情である。現代の労働者の一生は命令に従って働き可能な余暇には多くは感覚的な悦楽をもとめて過ごし、老いて無用だとされ死ぬという労働ロボット、消費者としては欲望飢餓ロボットとしての一生ともいえる。(現在、世界中で流行のリストラクチャリング参照)。

前述の通り資本主義的な市場経済ではマクロの需給不一致の構造的体質があるため、兵器生産と周期的戦争によるその消費が体制化している。歴史を見れば、周期的戦争がいかに資本主義のカンフル剤になり資本家に巨利をもたらしたか、「戦争はまったく他に例を見ぬ程儲かる『商売』」(H・リューマー『戦争経済と恐慌』)であるかが一目瞭然である。大国の兵器商人や戦争の仕掛け人たちいわゆる「死の商人」たちは、今も常時世界を駆けまわっている。

労働者の酷使と植民地・従属国獲得支配と周期的戦争とが構造化されている。このことを見れば、資本主義が物的富と権力という物的かつ「肉体的欲望」をエゴイズム(利己心)のフル稼働というもつとも醜く犯罪的な方法で無制限に追求しているという命題の正当性が納得されるだろう。(拙著『新ユートピア経済学』たま出版)。

マルクス経済学を含めて資本主義経済学(近代経済学)はもちろんのこと、大方の経済学はこの背徳性がどこにあるのか本当に認識していない。今、流行の新古典派総合の経済学は物量間の関数関係を合理的に数学的に論じること腐心する。数学を神と崇める、いわば今ほしだいに過去のものとなりつつあるモダニズムの産物たる偶像崇拜の一種といえるが、結果としては存在論(オントロジー)や人間本質論にてらして明白なこの経済制度の根元的顛倒性(物

質主義・唯物主義)を隠して人々を盲目化し、洗脳するのに貢献している。それはハイテク戦争とその報道の管理操作が、戦争による殺戮と破壊の犯罪性を見えなくするのに似ている。

ここまで論じてくれば、資本主義社会が本質的に宇宙調和の理法と道義を忘れた悪徳と汚濁と罪惡に充ちた社会システムであるかが了解されるだろう。まず第一に内的環境の破壊性。大部分の勤労者は生きるだけに精一杯で、その魂(靈性)を向上させ人格の向上に努める余裕が殆どないままで一生を終える。第二次世界大戦後に資本主義が生き延び発展したのは、内外の社会主義への対抗策として若干の福祉政策を実施し、フィスカル・ポリシー(財政・金融政策)を実施し、他面で広告・宣伝・教育・メディアやその他あらゆる方法を駆使して大衆の無限の欲望をかき立て消費者ローンの開発に成功したからである。

セックスとスポーツとスクリーン・アルコールが大衆を肉体的欲望の刹那的な満足と疲労にかり立て、決め手はさらに、マイカー・マンション・テレビとビデオと海外旅行だった。労働の生産性ないしは資本の生産性上昇はセンター(中心)部の勤労者に失う物を得させたともいえる。その反面、じつは労働者の自己疎外(自己喪失)つまり内面の精神的空洞化が起こり、人々はローンの見えざる鎖に繋がれて、それと覺らずいわば欲・我執の「獣の心」に墮ちる人生を強いられている。家族も友情も、教育も社会も、金銭と物欲で蝕ばまれて内面的に崩壊しつつある。

道徳的な頹廢―「人間の自己疎外」(マルクスはこれを内面の魂からの疎外と説かず、誤って労働からの疎外と説いた)・自己喪失は大ブルジョアだけでなく、庶民やプロレタリアートも含めて双方で、人間性破壊的に起きている。その典型をわれわれはモダニズムの典型たる現代アメリカ社会の犯罪や麻薬や銃砲やホームレス・ジョブレス・性道徳の低下傾向などの精神的荒廢の中に見出す。パックス・アメリカナの栄光と高圧性とその衰微と害惡の中に見出す。

ついでながら述べておくと、唯物弁証法（唯物論・無神論・唯物史観）を原理として建設されたソ連（解体してC I S）・中国・東欧の諸国に、われわれは一党独裁と官僚制的社会支配・管理と大衆の無気力と精神的かつ経済的な荒廃を見た。国有化を基盤にする集権的な計画経済が七〇年代や八〇年代にゆきつまり、社会主義ソ連が東欧諸国やその他に対して政経・軍事諸側面で、帝国主義的な支配と収奪をおこなうのを見た。唯物主義にもとづく共産主義体制が、『共産党宣言』の「プロレタリアート解放」の言辭とまったく正反対の近代的な専制支配を生み出すのを見た。（メドヴェージェフ『共産主義とは何か』、オタ・シク『クレムリン』、E・H・カー『ロシア革命』）。資本主義と共産主義はモダニズムの唯物主義（物質主義）による人間と社会の自己喪失の一卵性双生児なのだ。

「旧宣言」の人類解放・平等化の言辭における熱烈なる絶唱に反して、現実にはマルクス・レーニン主義の共産主義は専制政治と硬直的な指令経済を生み出す。官僚制集権支配と、自由とすべてを失った大衆を生み出す。デモクラシーや議会政治の意義を軽視し、階級闘争による政治権力の奪取によって実行される革命を重視する考え、これは権力の中央集中を軸にする改革。それは、人間本性のエゴイズムと肉欲の悪たる闇の側面をバネにするから、必然的に闇の社会制度を生み出す。警察や密告による「収容所群島」や武力と術策による帝国主義的支配を生み出す。多くの場合、ある意味では資本主義以上の背徳の社会システムを作り上げる。

十九世紀の『旧宣言』は、「この意味において共産主義者は、その理論を一言であらわすことができる。曰く、私有財産の廃止」は、多くが「人間性の廃止」「自由の廃止」となり、「貨幣」と「資本」の廃止は専制政治の成立になる。そして、「文化の喪失」「良心の自由」「信仰の自由」哲学・道徳・政治の廃止が起きる。階級対立は存続し、国家の廃止ではなく、国家は強大化する。労働者や市民は解放されるのではなく、「労働者は祖国をもっていない」ことが徹底

化される。『共産党宣言』の中核部分「一 プロレタリアと共産主義者」の内容は殆どすべてが裏目に出ている。つまり誤っている。あるいは（人間性の改善をせずに構想されるマルクス・レーニン説の共産主義とは）、実体はもともとそのようなものだったということもできるだろう。

人類解放やプロレタリアートの解放を誰よりも熱烈に追求したと思われるK・マルクスが誤って多次元世界の存在を否定しスピリット、霊（スピリットの存在）を否定したために、人間を利己心<sup>II</sup>排他心と肉体と物欲の中にとじ込めるのに手を貸した。魔が歴史の皮肉で専制政治と人類奴隷化のための書物を書いていたことになる。資本主義社会と同様に社会主義社会においても、人間は闇の勢力によって奴隷化されてしまっているのである。この文章を書いている時、ソ連邦ではペレストロイカ、グラスノスチをスローガンにする社会主義（共産主義）の複数政党制導入や民主化・市場経済の導入・企業の独立採算制や民営化や的所有への転換が唱えられ模索され、東欧諸国の民主化と市場経済の導入や民営化が進んでいる。その中でゴルバチョフのペレストロイカのブレーンであり推進力でもあったヤコブレフ氏によって、極めて重大な発言がおこなわれた。

モスクワ3日（一九九一年八月三日）<sup>II</sup>大野正美、朝日新聞はこれに「「圧政の原因『マルクス主義の教義に』」との見出しをつけている。

「ソ連の代表的な改革派指導者ヤコブレフ前ソ連大統領首席顧問が『社会主義は完全に敗北した』とする見解を表明したインタビューを掲載した。

インタビューはタス通信が行ったもので、ヤコブレフ氏は、『我々の不幸の原因はマルクス主義の教義にあるとの結論にますます近づいている』と強調。特にマルクス、エンゲルスの農民への軽べつ的な態度や、階級闘争による階



級の消滅という考え方が圧政に通じたとし、『活動の指導理念としてのマルクス主義を否定する』と声明した。」

ソ連でのこの証言は、われわれが今書いているこの文書の趣旨と一致しており、なによりの現実的な裏づけで、現場よりの証言と受け取れる。人間に内在する「神性」が否定され、共産主義は唯物弁証法と唯物史観から、人間の内面に根ざす普遍性を否定する、たんなる集団主義につうじ、いわゆる民主集中制は内部批判を封じて独裁制を支える。

(注) 但し、マルクスやエンゲルスの名譽のためにまたマルクス主義のある種の現代的意義のためにつけ加えよう。

『共産党宣言』に記されている内容は誤謬であるにしても、マルクスやエンゲルスが真に訴えたかったこと、つまり「リアル・マルクス」(真のマルクス)は意味があるのである。唯物論(三次元世界オンリー主義)に徹しすぎたがために、マルクスはすべての社会の歴史を物的な「階級闘争の歴史である」と勘違いし、人類の我欲・欲望・我執・個体主義からの解放を説くべきであるところで、『プロレタリアートの解放』のみを説いた。しかも憎悪と蔑視とそねみと敵視という闇の情念をバネにする階級闘争による、「階級決戦」によつてのみそれが可能だと説いてしまった。上記のような人間の闇の心情つまり悪徳を最大に發揮して善と美と正義の光の世界を実現することは、自己矛盾で不可能である。善をなすには光をもってするほかはない。真実の自己である人間の本質である精神・スピリットの実在性・真の实在世界を覚りえなかつたがために、「リアル・マルクス」の心情ともいえる「人間的解放と回復」(『経済学・哲学草稿』)の真の方途を見誤ってしまった。青年マルクスが口にした「人間的本質」「類的存在」(Gattungswesen)という形での「人間的本質」重視も表面的で上滑りのものになってしまった。

真の人間解放(エマンツィパツィオン)は、美德・徳義つまり光の心情による悪徳つまり闇の心情の克服としてなされねばならない。

既述のごとく資本主義的市場経済は通常の経済学や経営学が教えるごとく、機械や数字のように中性のものではない。人々の心と行為において、多くが悪徳つまり闇の心情をエンジンにして回転かつ循環し不気味に膨張運動をつづけている。悪徳や闇の勢力（例えば大富豪同盟や大国同盟など）の手に巨大な富と権力が積み上げられている。これが人間の「神性」ともいふべき、善意と友愛・隣人愛・同朋愛、つまり光の勢力をエンジンにする政治・経済制度への改革が、どうしても必要な所以である。すなわち友愛主義社会の理念こそが、資本主義を克服し、ひいては共産主義（社会主義）を克服する二十一世紀以降に向ける改革の理念として浮上する。これは精神改革・価値観の根底的な改革の世界観の革命を原理にする社会改革の理念であつて、たんに物をどうするといふ類の事柄ではない。つまりは、友愛も善も美も正義も宇宙の実在だといふ認識が軸になるといつてよい。

このような改革理念が必要な理由をもう少し述べるとしよう。貪欲や悪徳の社会システムである世界資本主義は、修正資本主義によつても支えられて、その限りなき膨張運動のために今や人類の存亡を危うくし地球を砂漠化する一歩手前のところまで来ている。即ち、先の内的環境破壊と並行した、第二の外的な環境破壊である。資本主義的市場経済は金銭の無限追求のために蓄積のための蓄積、累乗的な蓄積をする。このことは、蓄積された資本や富のうち消費に役立てられる部分はその一部分にすぎぬといふことを意味する。膨大な部分は無限の将来の蓄積増のために、つねに今現在消費されつづけている。これは、『共産党宣言』や『資本論』やその他の殆どすべての経済学文献が見落としてきたいわば盲点である。資本主義は体内に天文学的な不生産的消費・ムゲ（いわば物材と資源と労働力の濫費）を内包している経済制度なのだ。それは周期的戦争と同じく地球と人間の浪費と破壊を見えない形で内包している、倒錯した相克・濫費・浪費と破壊の経済制度である。

さて、資本が累乘的に蓄積・ストックされGNPが累乘的に増大して来また増大していくことは、地球資源の削り取りが累乘されていることを意味する。資本主義は産業をつうじ富を蓄積した、とりわけ工業化によって「巨大な生産力」を造出した。六十億人という。「呪文をもって地下から呼びだしたようなおびただしい人口」増加を見た。それは、鉄・銅、アルミニウム・ニッケル・石炭・石油など無数の地球資源をわずか五百年程で削り取り湯尽しつづける。森林が伐採され、河川と海洋は汚染され大気が汚染され、地球の温暖化が着実に進む。人類を紫外線から守るオゾン層が急速に薄くなりつつある、気象異変が確実に起きている。蓄積のための蓄積、絶えざるイノベーション（技術革新）によって生み落とされたGNP・生産力に破壊力の膨張と技術（テクノロジー）とモダニズム的なサイエンスの進歩は闇の心（肉体的物質的欲望の無限充足）のために誤用される結果として、地球を破壊し人類自体の生存条件の天井に向かって猛スピードで突進している。

資源はいわば収穫増法則と資源減法則の複合進行によって濫費・湯尽され、「恵みの星」地球の貴重な生態系は高度技術による大量生産と大量消費のハンマーでガンガンと打ち砕かれつつある。人類は便宜と快適さをもとめて自分で自分の首をしめている。また、ハイテク兵器と核兵器を駆使する戦争が起き人類をいつ破壊させても不思議ではない。資本主義と社会主義（共産主義）とは、ともに（ニュートン）・デカルト・ヒューム・スミス以来のモダニズムの唯物主義（物質中心主義）信仰と科学技術への盲目的な信仰と、醜いエゴイズムと物質的欲望や権力欲・名誉欲追求等に操られており、人類は破滅の瀬戸際に追い込まれている。

「社会に奉仕すべき生産力」が人類とその文明を破壊しようとする。まさに闇の勢力に身を売った「近代ブルジョア社会は、自分が呪文を唱えて呼び出した魔物を、自己で統制できなくなった魔法使いのようなものである」（『共産

党宣言』)。

二十一世紀に近づきつつある今、私達人類が直面する脅威は、『共產党宣言』が説いた商業恐慌や、レーニンの『帝國主義論』が説いた帝國主義戦争の危機やケインズの『一般理論』が説いた雇傭問題だけにとどまらない。さらにそれらを超えるその複合体としての巨大な危機であり、人類の破滅的な危難の接近である。まかり間違えば六十億人類の大多数が死滅するかという、表現するも困難な危機なのである。また世界独裁の危険である。あれやこれやの目先の些末な論議にとらわれず、大宇宙の目から地球人類の所業を見れば、これは明々白々の事実であろう。

碩学ポールディングはその著『ゼロ成長の社会』のなかで、ローマ・クラブ・レポートにふれてつぎのようにいつている。「現在の人口と資本の増加のパターンが、世界的な規模での貧富の格差をひろげるだろうことを示した。彼らは『悲惨な崩壊こそ、現在のパターンに従って成長を継続しようとする努力の最終的な結末だろう』と考えた。「工業社会に対する予言することのできることは総体的な崩壊である」と警告した。

人類史に光り輝く稀有の英雄といえるゴルバチョフは、「われわれ人類は、地球丸々に乗るあわせた乗客なのだ。おぼれるのも助かるのも、みんな一緒なのだ」。今の最大問題は「人類の存続そのものが脅かされ」ていることだ。「核戦争が起これば、地球のありとあらゆる生命が根だやしにされてしまう」と記す。

「われわれの時代に特異なもう一つの特徴はいわゆるグローバルな問題―文明の行くすえに決定的な影響力を持つ問題―が現れ、深刻化してきていることだ。具体的に言えば、自然保護、環境汚染―とくに大気圏と海洋の汚染―、天然資源の枯渇である。…そのほか人類共通の問題である飢えと貧困もある。地球の広い地域にまだに残っている飢餓と貧困をどうやったら断ち切ることができるのだろうか。」(田中直毅訳『ベレストロイカ』講談社一九六頁)

これらの言葉は人類が現在直面するに至っている問題、いまだかつて直面しなかったグローバルな問題をピタリと言ひあてている。モダニズムの唯物主義（三次元世界オンリー主義）の一卵性双生児ともいえる資本主義と共産主義とは、テクノロジーの開発と発達、資本（金銭や物財）と兵器の蓄積で未曾有の破局の危険を生み出した。「人類存続の危機」は他人事ではない。私達一人一人の問題であるし、愛する家族や親族や友人・子孫の浮沈の問題なのだ。

現在さらさら、米国の債務累増・財政赤字・経済の不健全化・東欧（含東独部分）やソ連の混乱と紛争と再建のラストや中東問題などや米欧日の構造不況などから、世界恐慌の危険がある。また大国間の摩擦と対立や地域紛争を含む世界戦争の危険がある。

（注）やや強くいえば、世界恐慌（world panic）と世界大の戦争（world war）…第三次世界大戦と世界独裁（world dictatorship）の危険がある。

我欲や我執やねたみや敵視などの「動物の心」—いわば個体主義にひき回される、近世・近代の考え方と生き方で人類は自滅の寸前にまできてしまった。今は階級闘争やイデオロギーの闘争や民族間・宗教間の紛争や闘争に心を奪われてよい時代ではない。お互いの「正義」に口角泡を飛ばしたり、力や武力による国際平和や国際的貢献などを権力にこびてがなり立てたりする（国連の武力行使も含め、国連の実権は米英仏などの一部の大国に握られている。その側面からいえば、国連は一部大国の機関である）時期ではない。

人類の「肉体的快楽」主義の乱行（とりわけ各国、各界の指導層、エスタブリッシュメントに主導される）に、地球（ガイヤ仮説のようにそれは生命体であるかも知れぬ）も泣いている。

今必要なのは、モダニズム（近代合理主義）を超える、上記のようなグローバルな視座と、人間本性や人間本質論、

宇宙・地球・文明論をも含む宇宙論につながるニュー・エイジの根元的視座である。マルクスもレーニンも、ウェーバーもケインズも、J・S・ミル（これらはいわばモダニズムのオールド・エイジのエリート達である）も真に直面したことがなかった、この重かつ大なる問題を解くニュー・エイジの視座だ。ニュー・エイジの超個・大宇宙論的な新たな哲学と新たな思想だ。

われわれ人類は今、かつて経験したことがない人類存亡（ついでにいえば、日本存亡）の重大問題に直面している。このような移行期には過去の知識やイデオロギーや思い込みやしがらみに捉われないことだ。これらの新しいテーマを解くためにあらゆる先入見を去って自由に想いをめぐらすべき時である。「新思考」が必要であって、この窮地を抜け出して人類が生き残る道を一人一人が自分の問題として考え探す努力をすべきだ。東の社会主義体制は市場経済と民主主義（議会主義政治）の方向へ、ペレストロイカ（各種の改革）ですでに歴史的な軌道修正を実行しつつある。国有化と計画経済化、つまりマルクス・レーニン主義が必然的に生み出す集権的な官僚独裁制ないし独裁（スターリンやチャウシュスク等々）と、無気力と非効率（つまり形をかえたサボタージュ）と、ワルシャワ条約のような大国の帝国主義支配から抜け出すことがまさに歴史的な事業になっている。

ただし、これが東側が西側の体制に戻り、市場経済化（実質は資本主義化）によるたんなる成長率アップやハイテク技術の本格的な導入という結果だけに終わるならば、「人類存続」のために課されたクイズは決して正解されたことにならない。

社会主義（共産主義）のたんなる資本主義への復帰では勿論のこと社会民主主義への復帰も、問題を本格的に解決できないだろう。十九世紀末から一世紀間、資本主義は実質上修正資本主義の路線を進んだ。その帰結が現在の終末

論的な末世ともいべき事態だった。地球と人類の荒廃と砂漠化、闇の世界への取り込みであった。大破壊と大同盟による支配・さらには『世界政府』による世界の寡頭支配化。人類の作った文明はやがて消え去って行くのか。人類は死滅するのか、それとも世界帝国において奴隷化するのか。さて、賃上げと反解雇闘争と年金や医療保険の（いわば再分配の）社会民主主義は資本主義と共産主義を足して二で割ったようなものといえようか。それは資本主義を補うものでこれまでの実績から推して、資本主義ないしは、フィスカルポリシー（財政・金融）とローンと兵器生産や年金や戦争経済の修正資本主義に勝利できる理念ではない。それは所詮はポスト資本主義（post capitalism）とポスト社会主義ないしポスト共産主義（post communism）の新しい理念、新時代をリードできる新思想ではありえない。

友愛主義社会（Friendship society）の理想は、新しい人類の光りである。これはプロレタリアートのみ解放思想ではない。したがって庶民（『旧宣言』がいうプロレタリアート）つまり勤労者一般や農民や自営業者だけの救済思想ではない。闇の勢力に操られている墮落せるブルジョアジーの救済思想でもあり、特定の階級のためではなく、全人類の救済のための光の思想なのだ。それは、人類の死滅と奴隷化を救う全人類の解放のための光の思想だ。エゴと各種物欲の闇の欲望の無限地獄の彷徨、いわばリングワンドンデルングの辿りつく破局から人類を救済するための思想である。プロレタリアートとブルジョアジーのすべてを含む人類救済のための思想である。

『共産党宣言』をひき合いにだして言うのと、それが、すべては「支配階級の利益」のためのものと手荒く罵り嘲笑し汚した、「人間性」や「自由」や文化や権利や性的な倫理「良心の自由」や「信仰の自由」を尊重することこそが、改革思想の中軸となる。本来はおそらく宇宙の究極存在から発し、人類史が生み出したまた本来人間に内在すると

いえる実体たるモラルや文化を、土くれの物質や個体主義的な奪いあいゲームや権力や技術や機械装置に優先する基本原理として確認し、その本来の座に復権させることが重要だ。創造主・宗教・道徳・哲学などの精神的価値を真に復権させ、これからはそれらの良き部分に、過去のいずれの時代にも優る權威を認めるべきであろう。

『共産党宣言』がバカにした「自由、正義などという、あらゆる社会状態に共通する永遠の原理」を基本原理にする改革思想こそを重視すべきである。それらのすべてを手荒に「ブルジョアの見解」だとレッテル張りしてゴミ籠ごみごに投げ込んでしまつてはならない。倫理も道義も念頭に置かない力と富（刀剣と金融）の社会にしてはならない。さらにいえば私的所有も貨幣も、市場経済が大切なものと同じように、尊重することがむしろ大切であろう。

『共産党宣言』は「あらゆる個人的な自由、活動および独立の基礎である財産」を共産主義は廃止するという。しかしながら、二十世紀の共産主義（ないし社会主義）の実験はウェーバーやシユムペーターやハイエクらも注目したように国有化が官僚制支配を生むこと、別言すれば財産が自由や権利の基礎であることを実証したといえよう。私的所有については財産の多寡による格差の存在という問題があるにしても、すべてを国有化ないし公的所有化することは事実上、一般人を無所有化するというのである。これはいきおい、個々の構成員の人格・人権がなく、自由がないことにつながる（M・ウェーバー『社会主義』講談社学術文庫、シユムペーター、中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済社など参照）。

共同とか連帯とかいっても個性なき同質化と集団主義化をいわば単純な共同体社会やコミューン（commune）を理想するのは、やはり「空想」であつて、没個性、没人格、没自由の集団主義、群れ主義、独裁、無気力、怠惰に転まがり込む。



世界観の自覚と精神革命・存在論の革新を基軸にする友愛主義社会建設の理念の内容に立ち入る前に、われわれはここでもう一度、これまでの人類の歴史、世界観、歴史観を点検しておこう。

まず(一)の階級闘争史観の誤謬をきちんと正すべきだ。これは人類史のすべてを闇と黒色に塗り変えた不吉な歴史観といえるものだ。

すべての人類よ、互いを分裂させ、猜疑心と競争心と他の敵視と蔑視とそねみと名誉心と暴力と陰謀と恐怖のとりこにするこの世界観から抜け出そう。神なき闇の世界観や人生観から抜け出そう。「ブルジョアとプロレタリア」の敵視と闘争やプロレタリアート(庶民ないし市民)のなかに埋め込まれた物質的利害を軸にする分裂と抗争と憎悪と仲間討ちから抜け出そう。勤労者と農民、商人、銀行家、経営者、男性と女性、年配者と若者・幼少者、知識人、聖職者、医者らの間の猜疑心と敵視とねたみ、人道主義者と共産主義者と社会民主主義の相互蔑視と敵視の、それらすべての不幸な分裂・内ゲバと闘争から抜け出そう。闇の世界観・社会観・人間観から脱出しよう。それらは人々の胸にそつと忍びよる悪魔の囁きだ。それらは「獣の心」、いわば劣情なのである。それこそが「闇の勢力」なのだ。すべての愛ある者、良心ある者よ同盟せよ。全世界の友愛者よ、連帯せよ。脱個体化して普遍性に目覚めることが大切だ。

啓蒙思想の結晶ともいふべき人権宣言、自由、平等、国民主権、思想の自由、信教の自由、人格の自由、財産権、そのバックボーンにある、自由、平等、博愛の原理は人間の本質に通じる大いなる価値だ。決してマルクスが軽蔑しこきおろしたようなブルジョアジーのたわ言ではない。かつて、『共産党宣言』は、人類の中に激越に敵対心を埋め込み、それが聖典視された。しかも「このパンフレットほど後代に影響をあたえることの大きかった歴史的文書は少ない」とされてきた。

ところが、筆者が四〇年余の諸学の研究生活で究めえたように、その基軸にある階級闘争歴史観が、唯物史観や唯物弁証法とともに誤謬だったのだ。このことが本当に判らねば、ソ連邦の共産党支配の解体の意味はわからない。

「これまでのすべての社会の歴史は、階級闘争の歴史である。

自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、ギルドの組合員と職人、要するに抑圧者と被抑圧者とは、つねに対立しあい、あるいは隠然とあるいは公然と、不断の闘争をつづけてきた。そしてこの闘争は、必ず全社会の革命的改造におわるか、さもなければ相闘う階級の共倒れにおわった。：

封建社会の没落のなから生まれてきた近代ブルジョア社会も、階級対立を廃止してはいない。それはただ新しい階級、新しい抑圧条件、新しい闘争形態を、古いものとおきかえただけである。

けれどもわれわれの時代、すなわちブルジョアジーの時代は、階級対立を単純化したという特徴をもっている。全社会は次第に敵と対する二大陣営、直接に相対する二大階級、すなわちブルジョアジーとプロレタリアートに分裂しつつある。」

初期の始元の社会ないし原初的的社会は別にして歴史時代に入ると、その時代、時代に階級、階層あるいはまた身分の違いが生じた。それは事実である。にしても、それらが「つねに対立しあい不断の闘争をつづけてきた」と解するのは、極端な単純化であろう。階層差があまり問題にならなかつた時期もあるし、互いが対立するだけではなく一種分業の状態で補完し支え合っていた時代（たとえば安全保障と民生）もある。また、すべてが一色で階層の違いが全くない平等な社会が、いつでも一番良く、かつ良く運営されるとは限らず、ある種の分化・分業や相互扶助でうまく運営される場合もある。

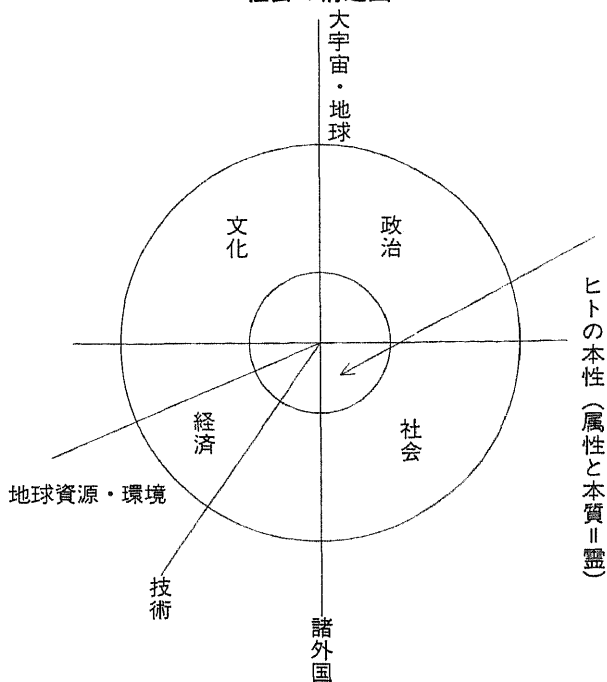
物質的利害を軸にすると闘争があつたとすれば、もちろん平安はまったくなかつたことになる。しかしある種の階層的秩序が保たれることで、平安が保たれた時代もある。すべての人々がおのれがおのれがで個我的に平等に自己主張をしていると、かえつて不断の対立や紛争状態になることもある。人々には個性もあるし、得手、不得手もあり、性別も年齢差もある。そのなかで人々が互いに助け合い「不断の闘争」もなく、平安・平穩に暮らすためには知恵が要る。文化人類学ないしは考古学が教えるように、人類が幾歳久しく用いてきたマナー、ルール、モラル、コミュニケーションや互酬の組織慣行や宗教や、各種のセレモニーも必要になつてくる。

歴史時代に入り社会の規模が大きくなり、その運営が複雑化し各種の協業や分業の水準が変化すれば、それに対応する社会組織や秩序の分化・分業や階層化が生じることもある。そしてそれが強い階級分化につうじることもある。階層や階級差があれば両者の間でつねに不断の対立と闘争があるともいきれない。階層間で相互補完や相互扶助の要素がある場合もある。会社と同じで、全員が経営者であり社長であつては、かえつて迅速な意思決定や巧みな意見調整ができないこともある。もちろん成員相互間のいわば横の意思疎通がうまくいかないと、独裁と服従ないしは巧みなサボタージュが広がることもある。

階級間での対立や闘争も確かにある。だがそれらの不断の対立・闘争つまり権力闘争のベクトルだけで歴史が動いてきたとするのは、大変に極端で、しかも誤つた単純化といわざるをえない。現実には他の多くのベクトルが絡んで歴史が形造られ織り上げられてきた。

歴史は多種多様なベクトルの複合体である。われわれ一人一人の生存と行動が多様な心理や欲求や必要等の多くのベクトルから成り立ち、そのような無数の人々が社会を形造っているゆえ、それは当然であろう。前にも述べたが、

社会の構造図



個々の社会が政経文社等の各種の要素の複合体である。国家もやはりそうである。経済には採取や農工商等の産業とそれらの技術水準、資本ストックの如何、労働力、資源、政治については政治構造、階級関係、法秩序、各種政策、外交関係等。社会については家族制度、社会心理、生活様式、都市と農村、社会慣行、交通・通信文化については、芸術、学術、宗教、スポーツなどが関係する。そこで、これらの多数の要素の関数(それに宇宙自然)として、社会・国家・歴史の歩みが見られる。

産業の推移、政治・社会の推移、文化の推移、各種技術ストックの推移など、多種多様な要素

によって現実の歴史が織りなされてきた。もちろん産業の推移、生産力の推移や階級関係も大切な要素だった。

こうして現実の歴史を彩ったのは政権の推移と交替、外交関係つまり交易や交流、戦争と平和、統合と分裂、和親と反撥・対立抗争、信教とカルチャーの推移、変化、交流と対立抗争や融和、無数の個人の人生だった。

王国や帝国の盛衰、それらの交流と対立抗争、諸地域間の交易、諸産業の盛衰、または、貴族と平民、領主と農民、王と市民の対立、時に革命。

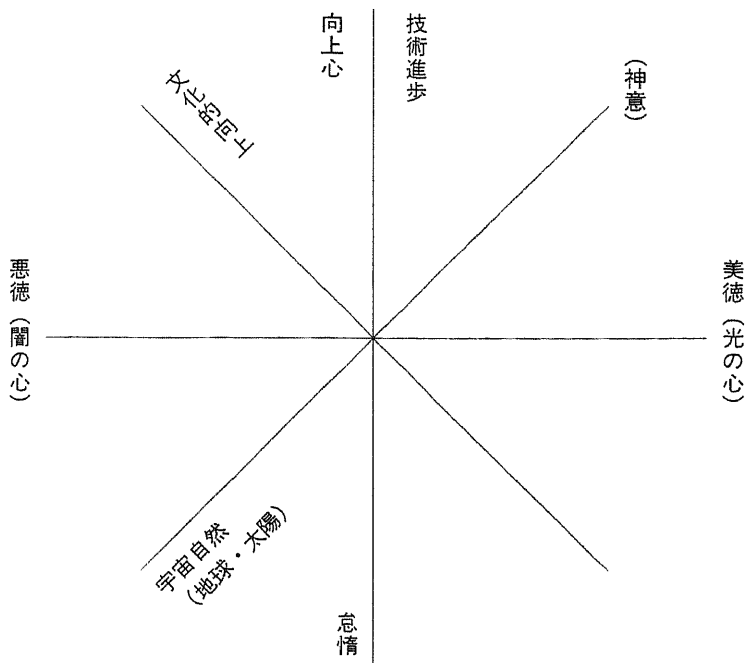
マルクスがいう下部構造（生産力―生産関係）決定論ではなく、政経文社間の諸エレメントの相互関係や諸国家間や、諸文明間の政経文社の相互関係が重要な規定要因になった。

これらの複雑極まりない動きをさらに要約すると、文化と技術の発展とスケール、個人や集団の富と権力の獲得をめぐる心理や思考と行為、友愛と正義協同や敬神の心理と行為の多元的複合に還元できる。

つまり、歴史を動かしてきたのは、我欲・物欲（権力欲も入る）の情念と友愛・協同と徳義の精神と、技術と文化の動向であり、これをさらに還元すれば、結局は高い「精神哲学」善なる魂（イデア）（ソクラテス、プラトン）と肉体的な欲望・欲求との相克、エゴイズムや身体的欲望と魂の欲求の闘争、即ち「光」と「闇」、光の勢力と闇の勢力との闘争であった。

『共産党宣言』は歴史を物的利害をめぐる「不断の闘争」・「獣の心」や階級闘争と技術（と資本ストックつまり生産力）から成り立つと述べている。技術をさしあたり価値中立的なものと考えたと、歴史を「獣の心」つまり悪徳、闇の心つまり稀少な物質と権力（全体として稀少な資源）の奪い合いから説いている（つまり餓鬼道の歴史）。

確かに、エゴイズムの我欲・物欲・自己利益（self-interest）、（物的富と権力をめぐる）のいわば、ゼロ・サム・ゲーム（ゲームの理論）、打ち合（exchange blows）から紛争や闘争が起こり、支配と被支配、戦争による勝利と敗北ないし和平、革命と反革命、軽蔑心と嫉妬心と敵対心、勝利と驕りと墮落、敗北・恥辱と復讐心が生じる。これらの多くはいわば人間の背徳いわば闇の心がなせる業である（いわば悪魔的な心）。



究極存在や高次元の意志

ただし、世の中はすべてが悪徳と闇の側面だけで動かされているとは限らない。大宇宙の英知につうじるものともいえる愛情、友愛、理性、正義などの善なる心、光の精神、人間の「神性」(divine nature)で動かされている面もある。家族の愛、友愛、同胞愛、人類愛その他の光の側面が人と人、国と国との平和的な相互交流や互助・互酬や相互奉仕を生みかつ支えている面もある。徳政に努める王や貴族もいるし、従業員の福祉や社会奉仕を重視する資本家や、あるいは経営者もいる。人々への奉仕や社会改良に心を砕く良心的な人々も多数いる。文化や芸術の振興を願って努力する善意の人々もいる。

これまでの世界史、個人、社会、国家、文明圏などの歴史は、美徳と悪徳いわば光の心と闇の心の二つの心、つまり「精神的な心」と唯物的な「獣の心」というベクトルと、向上心ない

しは怠惰のベクトルを軸にする。

動物の社会では、向上心・技術進歩や「精神的な心」はかなり少ない。愛情のような美德に数えてよいものもあるけれど、がいては本能的で精神的に高度なものは少ないようである。

人類社会では向上心、技術開発があるうえに「獣の心」つまり物欲や権力欲や名誉欲や性欲があり、いわば神の子として真善美、愛に向かう内在的な「神的な心」もある。従って争い（稀少資源の争奪ゲーム）もあるが愛による奉仕・友愛や互酬もあって、美しい側面もある。これらの諸要素も全体としては積み重ねられ発展して行く性格がある。さまざまなイノベーション（技術その他）があり、傾向として社会ないし国家のスケールがしだいに大きくなる。先史時代になるとそれが加速される。さらに近世には、「アメリカの発見……工場制手工業……工場制手工業にかわって近代的大工業がおこり、…大工業はアメリカの発見によって準備された世界市場を建設した…」

ルネッサンス、宗教改革、市民革命、近代工業と世界市場の発展、民主政治の発展等々。前近代あるいはアジアその他で発展のスピードがおそかったのは、専制政治や共同体社会や慣習によるしめつけや宗教的意識によるモラル上の抑制による。近世のヨーロッパでは、遠隔地商業の発展、十字軍、世界市場の成立やブルジョアジーの台頭などによって、その抑制が取り払われた。唯我・唯物的な利得指向いわば経済的な悪徳行為の全面解禁とキリスト教の布教精神の奇妙な混合体が、グローバル化や技術や産業、運輸・通信の発達や戦争の大規模化を生み出した。

このような世界史をヘーゲルは「世界史とは目まぐるしく変換する歴史の舞台の中で演ぜられる以上のような精神の道行「展開工程」であり、精神の現実的な生成であるということ、——これこそ真の神義論であり、歴史の中で神

の義を証しとすることである」。『哲学はただ世界中の中に反映する理念の光輝だけを問題とすべきである』（『歴史哲学』）と解した。ヘーゲル自身が言明しているように光の面にだけ注目したのが彼の歴史哲学である。そしてこれに反対して、どちらかといえば、闇の面いわば悪魔による操縦の面だけに注目したのがマルクスの唯物史観だった。

なお、歴史とはたんなる事件、出来事の展示場だという見方もあるし、さまざまな類型の文明の合計だとする見方もある。

いずれにせよ、これまで地球という惑星上でダイナミックに繰り広げられた人類史と世界史の全体を考える時、それは光一色でもなく、さればといって『旧宣言』がいうように闇一色に画きだされるべきものでもない。光もあれば闇もあり、発展もあれば後退もある。これらの勢力の戦いの総括として世界史を掌握することができる。

（美德と悪徳と、光と闇との相克や技術（科学と各種の装備）の発展を軸に展開する世界史）

そのなかで目につくことがある。（イ）グローバルな経済、政治、文化の交流や科学技術のめざましい発展、生産力と産業の発展、（ロ）我欲・自己利益追求・貪欲・人間の自己実現・自助が近代においてきわだってめざましい。だが、（ハ）人間は品性面では殆ど向上せず、賢くならない。人間の友愛・博愛・同胞愛・美德・徳義・正義・公正（さらには宗教についても若干）の面では、余り発展が見られない。エゴイズムや各種の物欲にとりつかれて、賢くならない。（ハ）についてはむしろ退歩さえ見られる。

別言すると、（イ）（ロ）（ハ）のめくるめくばかりの展開は、（ハ）つまり、人間の光の側面・美德を抑制することによって実現されたとさえいえる。現代の地球人の価値観は狂っている。現代の地球人の考え方や価値観は完全に間違っている。さすがに、『共産党宣言』もつぎのように述べている。



「ブルジョアジーは歴史上において、最高度に革命的な役割を演じた。

ブルジョアジーは支配権を握ると、いつさいの封建的・家父長的・牧歌的諸関係を破壊してしまった。ひとをその生まれながらの目上にむすびつけていた、色とりどりの封建的なきずなを容赦なく引きちぎって、人と人とのあいだには、ただむき出しの利害、冷酷な『現金勘定』以外になんのきずなをも残さなかった。宗教的な情熱や、騎士的な感激や、町人的な人情などという神聖な感情を、氷のように冷たい利己的な打算のなかに溺おぼらせてしまった。人格の尊厳を交換価値のなかに解消させ、さまざまな既得の特権的自由を、一つの無責任な商業の自由とおきかえたのである。……

ブルジョアジーは、家族関係からセンチメンタルなヴェールを引きちぎって、それを純然たる金銭関係に還元してしまった。」

この文章には「宗教的な情熱」「人格の尊厳」「神聖な感情」という美しい言葉があるけれど、『旧宣言』はすぐにこれらのすべてに「封建的なきずな」とか「宗教的および政治的幻影でおおわれた搾取」というようにくさす修辭をかぶせてしまう。生産力、階級関係、経済制度などのいかに離れた美德、モラル、良心、審美眼などのいわば人間の本来の善性はないという、そうしたトーンなのである。プラトンやキリスト、釈迦やヘーゲルらが指摘する、「自由、正義などという、あらゆる社会状態に共通する永遠の真理がある」という宇宙存在論的な事実、モタニズムのマルクスはこれを絶対に認めたくないようである。人間性の内面の深い真実（人間の真の実体である魂・スピリット）を直視したくない、直視することを拒否するかたくな姿勢がそこにはある。経験論の観点から、彼の心情にはそう断言しようとする内面的な歪みや傲慢性がある。すべての人間性の高慢さも情熱も神聖な感情も地上での後天的なこしら

え物で物的な事柄の反映物で模写だと彼はいう。マルクスにとって人間の实体は肉体である。あるいはせいぜい意識性であるとか、「労働」であるとか、「類的存在」である（『経済学哲学草稿』を参照）。

マルクスはキリスト教にも啓蒙思想にもドイツ哲学にも「中世の僧侶どもが、古代異教時代の古典の原稿を塗りつぶして、その上にカトリック高僧伝を書いた」、「真実の社会、人間性の実現に関する無用の思弁」、「ドイツの著述家たちは、：フランスの原書の裏に、自分たちの哲学的駄弁を書いた」と悪罵し嘲笑・冷笑する。「呪文」・「魔物」・「俗物」・「魔法使い」・「婦人共有制」・「偽善」・「不吉らしい予言」・「ほら」・「伝統的な呪い」・「醜悪な」・「骨抜き著作」・「空想の蜘蛛の網」・「忌まわしい考え」・「雑多のとるに足らぬ改良主義者」・「戦慄せしめよ」。

なんと無数に・いわば劣情を刺戟する「汚れた言葉」侮辱・敵視のレッテル張りが、このプロレタリアートの解放のための「聖典」ともいわれた書物の中にちりばめられていることであろうか。

そして、これが世界の労働運動のはしりともいえる第一インターナショナル（国際労働者協会）の綱領として採択された。これは歴史の皮肉というほかない。しかもこの書物があたかもバイブルのように、「その内容が豊富で深い」と、文章が力強い名文でひとつひとつの頭と胸に同時に訴えることは、これを一読した者が一致して認める点である」と受け止められ、全世界で読みつがれてきたのである。

この『旧宣言』が人間性の内的な美德（人間の宇宙普遍性につうじる实体）を、理解できず誤解していたことがその後の社会主義運動や労働運動や社会改良運動に生んだ。その歪みが、山のように巨大であることを決して見落とすべきではなからう。この種の発想は唯物的な階級闘争・憎悪を煽動することはあっても、人間の真の解放、人間性の真の解放（エマンツィパティオン）を実現しはしないだろう。真の解放とは身体から発する闇の想念や我欲からの

解放なくしてありえない。

美德と悪徳の相克と闘争の人類史の中で例外的に現代社会では悪徳の全社会的な野放しに近いことがおこなわれた。欲望経済や欲望政治がおこなわれるようになった。それが近世・現代での産業・技術が高度に発展し、経済・社会・政治・情報・文化の世界的交流が超スピードで進んでいることに結びついている。

ここに現代の人類文明の根本問題が存在する。

現代は光に直面する。

地球人類が民族と国家とイデオロギーと宗教・思想・階級・階層等の差を超えて帰一合一（グローバル化）し、美德が世を周く照らし人類が高度の技術の成果を享受し、文化の花を咲かせる理想境に入って行く。

他面で現代は闇に直面する。生態系が破壊され地球資源が涸渇し、地球が砂漠化し、核戦争やハイテク戦争によって地球人類が自滅しかねない危機がある。リサイクリングや環境浄化運動や汚染防止の努力がされても、唯物的かつ計数的な成長追求や快樂追求がこのまま続く限り、所詮破局的な事態は免れない。物的な富、各種の便利性、領土、資源、権力、覇権、地位、名譽、評判、異性、アルコールなどを人々が求め争い、国家は国家と争い、ハイテク戦争、帝国主義戦争が起こる。国際的な大財閥や大国は世界帝国の樹立にあらゆる術策を練ると伝えられ、国際連合はその道具と化しつつある観もある。他方で第三世界その他で世界的な食料不足も起き飢餓が広がる。悪徳や闇の情念とテクノロジー（技術）の高度化がリンクする。<sup>(注)</sup>

高度テクノロジー（コンピューター・ミサイル・航空機・核兵器等々）が闇の勢力、悪徳・「肉体的欲望」・身体的快樂を追求（致富と権力掌握）するために非倫理的に駆使される。砂漠化されたかつての文明の地、アフリカや中東

を想像するがよい。今度は地球全体がそうなってしまう。

地球人は、今後そのいずれを選択するのだろうか。眼前の流れは明らかに破滅化と自滅と世界独裁へのコースをたどっている。

末法の世（かのハルマゲドンの時代かとも云われる）ともいうべきこの時代に、われわれが直面しているのは、ゴルバチョフが指摘するように、厳しい「人類存続」と、世界帝国主義からの人類解放の問題である。

(註) 世界資本主義下での国際大財閥の同盟による致富と権力掌握の工作は、国際連盟や国際連合の悪用により、また現在は E C と N A F T A さらには A P P E C への世界の三極囲い込みを實行し、さらにこの三極ブロックを「三極委員会」や世界国家 (World State: 国連の悪用) のような超<sup>スライムステイト</sup>国家が操作する。このような世界政府樹立による世界支配 (人類の総奴隷化)

「カウツキーのいう「超帝国主義」の地下工作が進められているとも伝えられる (一例として、『ムー』一九九三年一二月号、学研その他)。世界資本主義の拡大・滲透運動は世界独占を生じ、それが世界資本政府による世界独裁支配 (世界ブルジョア支配) に向かう可能性は否定できない。

したがって時代の課題はもはやたんなるプロレタリアート (勤労者・労働者) の解放のみではない。ブルジョアジエの私有財産の奪取でもない。人類自滅の回避と人類奴隷化からの解放でもある。リアル・マルクス (真のマルクス) を生かすために、十九世紀に書かれた『共産党宣言』の章句を確認してみよう。

「プロレタリアは、これまでの自己の所得方法、したがってこれまでの全所得方法を廃止することによってのみ、社会的生産力を獲得することができる。プロレタリアは、みずから擁護すべきなものをもたない。彼らはただ、いっさいのこれまでの私有財産の保証や、私有財産の保護を破壊すればいいのである。」

「われわれは今、プロレタリアート発展のもつとも一般的な諸局面を叙述して、多かれ少なかれ現社会の内部にひそんでいるところの内乱が、公然の革命となつて爆発し、ブルジョアジーの暴力的打倒によつて、プロレタリアートが支配権を樹立するところまで追跡してきた。」

なんとも激烈なアジテーションではある。これらのテーゼの基底には階級闘争史観がある。プロレタリアートによる階級支配は政治権力の掌握による、その決め手はまた、「ブルジョアジー成立の基礎である生産手段および交換手段」のプロレタリアートによる収奪にあるという、唯物史観が横たわっている。

「ブルジョアジーは、次第に生産手段の、財産の、および人口の分散状態をなくしてゆく。彼らは人口を集中し、財産を少数者の手に集積した。その必然的結果は政治上の中央集権であつた。」

(註) この章句はある意味であたつてゐる。欧米日の先進国でかつ世界的に、この財力の集中と集積による世界的な中央集権化―官僚制化―が進んでいることに、世界人類は注目する必要がある（文中傍点は筆者）。

ブルジョアジーとプロレタリアートは日常敵対的対立関係にあると解されて、ブルジョアジーの打倒はその支点である私有財産の収奪に焦点が絞られる。ブルジョアジーの私有財産はすべてが呪詛的にされて、「ブルジョア的財産の廃止」・「私有財産の廃止」・共産主義による資本主義の克服と止揚が提唱される。

今日では「私有財産の廃止」と国有化が階級対立の廃止ではなくプロレタリアートの独裁や新しい支配を生み出すこと、前衛党官僚によるプロレタリアートとかつてのブルジョアジーにたいする階級支配を生み出すことが周知知られている。「全般的サボターージュ」がひろがることも知られている。（メドヴェーデフ『共産主義とは何か』上・下三一書房、オタ・シク『クレムリン』時事通信社参照）

## 二 友愛者と人類救済

私有財産の廃止は決定的な解決策にならない。市場経済の廃止は解決にならぬどころか誤りである。何故に『旧宣言』はかくも激烈に「私有財産の廃止」を訴えるのか。持たざる者の持てる者への嫉妬心・憎悪の悪想念をかき立てようとするのだろうか。マルクスは闇の心・悪徳つまり憎悪や呪詛や暴力をつうじて光の国、美徳の樂園つまりユートピアを造りだすのを念じるかのようなのである。

悪徳（闇）によつて美徳（光）は作り出せない。悪徳は必然的に悪徳を生み落す。「猜疑は友情の毒牙」(suspicion is the fang of friendship) だ。

フランス革命でのジャコバン独裁、ロシア革命でのスターリンの肅正と共産党一党独裁。ポル・ポトによる独裁と大量殺戮等、その例証は数えあげれば際限がない。

可能性なしとしない世界恐慌と人類破滅の終局戦争、超国家を用いる世界独裁、オゾン層の破壊による人類自滅―皮膚ガンの大量発生、地球温暖化による気象変化と水位の上昇・陸地の埋没、地震・噴火、緑の破壊による大気圏のバランス破壊、海水・河川の驚くべき汚染、つまり地球生態系の破壊・動植物の圧殺と人類の自滅。近頃よく語られるようにたしかに、これらは中生代の恐竜の破滅と同じく人類の破滅を連想させるに十分な材料である。欲望の無限地獄のなかでローン、債務奴隷として欲望の奴隷として、苦しみもだえている人類よ。自らの愚かしさを今こそ悟ろう。

巷では、「ノストラダムスの大予言」など世紀末的予言―十九世紀末よりずっと真実味を帯びている―の戦慄の不安感が広がりつつある。至高の絶対的存在よりの被造物である人間が神を否定し、神を乗り越えられずと思ひ始める慢心こそが災の源なのだ。生産力や科学技術への神（究極的には大宇宙の絶対精神とでもいうべきもの）を恐れぬ盲信からそろそろ私達は目覚めよう。我欲（エゴイズム）と我執、蛇の嫉妬心、金銭と権力、地位・ステイタスと他人の評判や勲章・セックス・麻薬の唯物質主義からそろそろ抜け出そう。不正の殺傷、ビジネスとしての武力行使・戦争という名の殺傷を、「正義」や平和のため、国際貢献のための戦争であるかのように大衆を洗脳し、彼等にコストを払わせるかたちで実行するのをやめよう。国際社会で生きるには大国化し国家主義化し、軍事大国化するほかないというせりふによるネオ国家主義の、さらにはまたネオ・ファシズムの悪魔の所業をまたまた繰り返すのはもうやめよう。地球資源の涸渇、生態系の破壊、百億人にもものぼろうとする猛烈な人口増加と収穫通減法則と資源通減法則の冷厳な支配がある。私達の子や孫はその法則でやがて窒息しそうなのだ。マルサスやリカードの収穫通減法則の懸念は資本主義の諸段階を通観すれば、やはり真実だったのだ。『旧宣言』や『資本論』は生産力信仰におちいっており、奇妙にもこの事実について、黙して語ろうとしない。

過労死、偏差値輪ぎりの幼少年虐待、個性を軽視する学校でのイジメの横行、ローン潰け、背広細民、札ピラ切り、政治スキャンダルと、実業スキャンダル、マフィア、金銭による家族や親族の分裂、学校スキャンダル。セックス・スキャンダル・麻薬・失業者の大群、難民の群れ、ネオ・ナチズムの国際的な台頭（独仏伊ロ米等）。

人心の切り売りと良心の切り売りの横行。森林の伐採、河川海水汚染、大気汚染、異常気象。これらの人類の愚行・闇の所業は友愛宇宙の調和をそこね、友愛の星、地球の容量をすではなはだしくはみ出し、そのバランスを崩しか

けている。母なる星（生命ある）地球の破壊や、欲望の奴隷に人間が化していることにもとづく人間性の破壊は地球全面で日夜突貫工事だ。教育の荒廢、人間の奇形化、家庭の破壊や解体、親と子との他人化、愛情の圧殺・寸断。

これらの末世的事態から抜け出るために、宇宙と人類友愛の義にめざめて、非戦平和、帝国主義戦争の防止、エコロジー（ecology）、地球自然保護運動、勤労者の福祉改善、中小弱者の保護、教育問題や家庭問題、社会問題への取り組み、人類の精神的再生・第三世界の救済、ソ連・東欧圏の救済、世界独裁（世界のすべての植民地化）阻止、これら地球人類の救済事業のために、人類は友愛の手を繋ぐねばならない。プロレタリアートの解放、「ブルジョアとプロレタリア」の人類の同士討ちでこの終末的事態が解決されるわけではない。

既述の如く、狹隘な階級闘争史観では、このような地球的規模の問題に対処できない。美德と悪徳の相克と闘争、つまり、地球上で天使と悪魔の闘いが行われている。そのなかで私達は事態の真実に目覚めて、悪徳がもたらしつつある人類破局の事態（人類の欲望奴隷化と世界帝国形成による真の奴隷化）を回避する努力をするほかはない。勤労者、経営者、中小企業経営者、大企業の経営者、農民、知識人、宗教者、教育者、母親、若者すべての民族、すべての国家・国民、地球上のすべての九十九パーセントの人々が光の心に、良心・美德・徳義・友愛に目覚めて友愛の光の輪を広げて、救世と救人類の努力をすべきだ。天使の心に目覚めて悪魔の跳梁を封じるべきだ。われわれ自身と将来世代（子孫）を守る獅子奮迅の努力をなすべきであろう。

人類史の美德と悪徳との相克図のあげ句のはてに、欲望経済と欲望政治との唯物主義・唯権力主義の闇の勢力が友愛、正義の美德の光の勢力を抑圧することで、ついに人類破滅の瀬戸際にまで辿りついてしまった。奈落へのまっしぐらの転落か、それとも地上ユートピア建設への力強き前進か。



釈尊はかつてクシナガラの郊外、シャール（沙羅）樹の林の中で最後の教えを説かれた。「煩惱の賊は常におまえたちのすきをうかがって倒そうとしている。もしおまえたちの部屋に毒蛇が住んでいるのなら、その毒蛇を追い出さない限り、落ちついてその部屋で眠ることはできないであろう。」

煩惱の賊は出さなければならぬ。お前たちは慎んでその心を守るがよい」

「教えのかなめは心を修めることにある。だから、欲をおさえておのれに克つことに努めなければならない。身を正し、心を正し、ことばをまことあるものにしなければならない。貪ることをやめ、怒りをなくし、悪を遠ざけ、常に無常を忘れてはならない。」

「人は欲のために争い、欲のために戦う。王と王、臣と臣、親と子、兄と弟、姉と弟、友人同志、互いにこの欲のために狂わされて相争い、互いに殺しあう。」

「尊き人の世せいづるを見るは難く、その人のいづくにも生まるるにはあらず、かかる賢き人の生まるる、その種族は幸せにして栄えん。」（『仏教聖典』 仏教伝導教会）

終末の危惧に心を痛める人々が多い。口を開き互いに啓発し地球を守る日輪の如き友愛のネットワークを作り、正しき心もて断末魔の苦しみにのたうちまわる―国際政治と国際経済での相克・奪い合いと、国内政治・経済の奪い合いから―、世界の人類を救おう。持てる者と持たざる者、プロレタリアートとブルジョアジーの反目相克が主題ではない。もはや、プロレタリアートの救済のみが時代の主題なのでもない。人類全体の救済と解放とニュー・エイジ（new age）新社会（ニュー・ワールド new world）の建設こそが時代の課題なのである。

「理法が何であるかを知らない獣のような愚人は、（安らぎの）近くにあっても、それを知らない。生存の貪欲にと

らわれ、生存の流れにおし流され、悪魔の領土に入っている人々には、この真理は実に覚りがたい」（『前掲書』一三三六頁）。現代諸国各界の著名人たち、あるいはその他のリーダーたち、オピニオンリーダーたちも、知識人たちも、また市民もこの文章に該当しない人々が少ないのは悲しい。

ブルジョアジーに対し闘争し、「プロレタリアートの支配権を樹立すること」が解決ではない。私有財産の廃止が解決になるのではない。再分配政策などにブルジョアジーとプロレタリアートの調整の要はあるだろう。しかしながら、主たる課題は別の処にある。つまり悪徳の支配（我欲経済たる資本主義や金権我欲政治、我欲国際政治・経済）に対して闘い、友愛と美徳の光の社会秩序と国際秩序を建設することが眼目だ。精神革命による、価値観の革新にもとづく社会改革こそが、二十一世紀以降の世界史の旗印になろう。